

中国の教会の宗教的儀礼と教会の建築について本色化の動き 1920年代を中心に

徐 亦 猛

1922年4月、北京郊外の清華大学において「世界基督教学生同盟」(World Student Christian Federation: WSCF)大会が開かれ、その大会を契機として全国的規模の反キリスト教運動が起った。反キリスト教運動の期間中、中国の文化人や知識人はキリスト教に対して猛烈な批判を展開した。反キリスト教運動のキリスト教に対する批判は、二つの点である。一つはキリスト教は迷信であり、非科学的、非理性的であり、しかも現代に適応しないで、中国の発展には障害となるという批判である。もう一つは、キリスト教が帝国主義的文化侵略の道具であるという批判である。そのような情勢の下に、中国キリスト教知識人が立ち上がり、反キリスト教運動からの非難に対抗して、キリスト教本色化運動を提起したのである。中国におけるキリスト教本色化運動に積極的に参加した教会の指導者や知識人たちは、キリスト教が国家再建のために具体的に貢献できる可能性を模索していた。つまり、これまでみたような批判を受け、「洋教」と呼ばれるキリスト教が、どのようにして中国文化との関連を見出すことができるのかということである。結局本色化運動の指導者たちは、福音と文化、中国伝統文化とキリスト教信仰を深く関連づけることによって、キリスト教を本色化しようと試みたのである。さらに中国教会を西洋教会から独立させ、中国キリスト者の利益は全民族の利益に服従することが、中国キリスト教会にとって唯一の進む道であることを認識した。しかし、中国におけるキリスト教の本色化問題を考察する際、単に歴史的背景や思想を検討するだけでは不十分であり、中国の教会の本色化における実践的な動向も注目すべきであり、そのことにより、本色化問題の全体像を見ることができる。

中国の教会の指導者は、キリスト教本色化理論の探求や教会内部の組織・経済の本色化実践が進むと同時に、キリスト教儀式についても具体的な改革を行った。彼らは中国の伝統習慣を研究し、新たな本色化の儀式や宗教活動を展開し、キリスト教と中国文化が融合する雰囲気を作り出した。神学者王治心はキリスト教について、「本色化した教会にとって、一番重要な問題は、如何に固有の文化的伝統を巧みに残し、キリスト教と融合した中国の教会を創立するかということである。これこそが、中国民衆からの反感を受けることなく、本色化した教会が到達すべき目標である」と述べた。そしてそのような考えに基づいて、実際に様々な実践的な動きが現われた。たとえば、教会の指導者たちは直接または間接的に孔子の儒教学説を引用しながらキリスト教思想を解説することによって、中国人がキリスト教を理解し易く、受け入れ易くなるという試みを行った。また中国式の

教会堂の建築や、中国風の讚美歌の編集、結婚と葬儀の儀式の規定などについても、当時の本色化運動に対する、関心が大きかったことが表れている。

中国における本色化の議論について、学术界から注目を浴びて、研究成果がかなり出されている。中国大陸の代表的本色化についての研究として挙げられるのは、顧長声の『伝教師与近代中国』¹、楊天宏の『基督教与近代中国』²、顧衛民の『基督教与近代中国社会』³である。顧長声はその著作において、一章を費やして、1920年代におけるキリスト教の本色化運動を論じた。楊天宏は反キリスト教陣営の言論行為から着手して、反キリスト教者は如何に知識層や学生層を動員し反キリスト教活動を行ったかについて、教会に対する様々な影響などに言及したが、反キリスト教運動に対する教会の応答や姿勢などの課題をほとんど取り上げなかった。顧衛民は1920年代に教会が直面した挑戦及び教会内部の社会情勢に適應できるための自己調整などのテーマを取り上げて分析し、中国教会の指導者呉雷川、呉耀宗などに見られる社会を救済しようとする決心や主張、及び中国におけるキリスト教本色化運動の展開について概括的に紹介した。また地方の宗教史の著作『上海宗教史』、『宗教与上海社会変遷』などにおいても、各地方の本色化運動について少々論じた。更に近代の通史的研究においても本色化運動について触れている。例えば白寿彝の『中国通史』⁴、熊月之の『上海通史』⁵、章開沅の『湖北通史』⁶などからキリスト教事業の本色化について分析し、近代中国社会における本色化の地位及び影響を明らかにした。そして、文化史の研究においても、キリスト教が文化を広める中で果たした役割について研究がなされている。史全生編『中華民国文化史』⁷において、キリスト教本色化事業に触れられるなど、中国におけるキリスト教宣教に対する役割を充分認めている。

20世紀後半以後、香港と台湾の中国キリスト教史研究においてはかなりの進展が見られ、相当の研究成果が挙げられた。地域における本色化運動の研究など優れた研究成果も少なくない。香港の李志剛は教会の医療事業の本色化について、深い研究を行った。彼は「民国以前香港基督教之本色化事業及其影響」⁸において、本色化の視点から香港雅麗氏記念病院と香港西医書院の設立及び発展について研究し、香港の医療事業の本色化を明らかにした。香港道声出版社から刊行された湯清の著作『中国基督教百年史』⁹では、キリスト教宣教の期間（1842年-1907年）の宣教事業が国別に論じられ、各宣教協会による宣教の歴史及び本色化運動への協力についても言及されている。台湾大学歴史学部教授查時傑の著作『民国基督教史論文集』¹⁰において、1911年から1992年までの約80年間の中国キリスト教の発展過程が詳細に考察され、中華民国成立以後の中国におけるキリスト教の発展状況について、数少ない研究著作と評価された。その著作の中では反キリスト教運動と本色化運動についての研究が三つの論文によって論究されている。反キリスト教運動と本色化運動の時代的背景、発展の過程及び初期の教会の応答活動について深い分析がなされたが、反キリスト教運動の第二段階（1924-1927年）における教会側からのより大規模で影響力ある応答活動については全く触れられなかった。次に、楊森富の『中国基督教史』¹¹、邵玉銘の『20世紀中国基督教問題』¹²などの著作においても、キリスト教本色化問題について、相当な注目がなされている。

日本の山本澄子の著作『中国キリスト教史研究』¹³においては、1807年R.モリソン（馬禮遜 Robert Morrison）の渡来から190年間の中国プロテスタントの歴史を眺めながら、宣教百年を経た1907年から第二次世界大戦までの期間に重点を置いて詳しく考察した。特に山本はその期間に、中国キリスト教界において三つの大きな動きを取り上げている。すなわち、中国教会自立運動、キリスト教中国化運動、教会合同運動である。山本はこれら三つの流れが相互に影響し合い、絡み合いながら発展してきたと分析した。

上記の学術研究の背景のもと、中国におけるキリスト教本色化運動の研究がある程度の成果が挙げられたことが分かるが、本色化の実践的な動きについて、まだ明らかにされていないと言わざるを得ない。

1920年代のキリスト教本色化の議論を行った背後に、一部の中国教会や教会の指導者たちが積極的に議論した本色化の必要性や具体的な構想を本色化の実践に移行したことについては看過できない。中国におけるキリスト教本色化運動は単なる理論的な運動だけではなく、キリスト教会において実践的な運動でもある。本論文は、これまでの研究に欠けていた中国教会における本色化実践論的考察を独自に展開することによって、本色化運動の実践的動向を新たに評価することを意図している。

本論文の構成は、中国におけるキリスト教本色化の代表的な実践の試みを二部に分けて、分析し、考察する。前半部分（祭祀風習、祭日の風習、婚葬風習）は、キリスト教を受容する中国の中心的な宗教伝統・宗教文化とキリスト教との関わり、キリスト教の対応について考察する。後半部分（礼拝儀式、教会建築、賛美歌、聖書翻訳）は、このキリスト教の対応をキリスト教側の伝統に則して検討する。

祭祀風習

祖先祭祀問題はキリスト教と中国文化との間の大きな相違である。祖先祭祀は中国においては、何千年も前から広く伝わってきた風習であった。勿論、この風習は中国文化の本質的特徴を集中的に表している。祖先崇拜は儒教の「孝道」と繋がり、核心的な存在である。「孝道」は最も価値ある中国の伝統的倫理道德である。中国人にとって、倫理道德は人間の心に深く根ざしている。心が墮落しない限り、隣人を憐れみ、親を愛し、年長者を敬うのは自然である。人間は社会で暮らすように生まれついていて、それに必要なものがすべて備わっている。儒教文化において、最も大切な教えである親孝行とは、親が生きている間の孝行は孝養と言い、親が亡くなった後の祭祀は孝享ということである。儒教の経典である『論語』為政篇において「孟懿子、孝を問う、子曰く、『違うなかれ。……生くればこれに事うるに禮を以てし、死すればこれを葬るに禮を以てし、これを祭るに禮を以てす』とや」（孟懿子問孝、子曰、無違、……生事之以禮、死葬之以禮、祭之以禮）、『禮記』祭統篇において「是の故に孝子の親に事うるや、三道あり、生くれば則ち養い、没すれば則ち喪し、喪畢すれば則ち祭る。養えば則ち其の順を觀るなり、喪すれば則ち其の哀を觀るなり、祭れば則ち其の敬して時なるを觀るなり。此の三道は、孝子の行いなり」（孝子之事親也、有三道焉、生則養、没則喪、喪畢則祭）、祭義篇において「君子は、生くれば則ち敬いて養い、死すれば則ち敬いて享し、終身辱めざるを思うなり」な

ども、生きている親に対する義務と死者（先祖）に対する尊敬が連続体を構成するという考え方をあらわしている。中国伝統風習における親孝行の行為には奥深い哲学の基礎が含まれている。儒教において、「万物本乎天、人本乎祖」（万物は天に属し、人は先祖に属す）との教えから、天地、祖先祭祀の目的とは、人の報恩の心を養うことである。先祖に対しての尊敬は、身近な家族への感情へと繋がる。祖先祭祀は伝統倫理孝道に対する強化であり、昇華である他、祖先祭祀自身は一種の教化でもある。このような行為は血縁を絆とする宗教社会における倫理伝統の宗教的特徴を表している。

キリスト教は一神教であり、出エジプト記 20：3 には「あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない。」と記されている。従って、キリスト教にとって、祖先祭祀は非常に敏感な問題であった。明朝の頃、イエズス会は中国での宣教を成功させるため、信徒における祖先祭祀への参加を許可したことが、一度あった。当時イエズス会の一人の宣教師として中国に来たマテオ・リッチ（利瑪竇 Matteo Ricci）は、はじめは中国のキリスト教信徒に向け、祖先崇拝の参加を禁じた。しかし、その後、マテオ・リッチは祖先崇拝を禁じつづければ、中国のキリスト教信徒の人数が減る一方であることに気づいた。このような状態が続くと、中国におけるキリスト教の宣教の局面が開かれなると同時に、中国人からの怒りと反感を買い、宣教師の足場がなくなる。そのことを考量して、彼は祖先崇拝の問題に関して柔軟な考えを示した。すなわち、儒教の共同の祭に参加することや、祖先崇拝の儀式を行うことは、宗教的な行事ではなく、中国人として当然行うべき道徳的な慣行であるとして、これを認めたのである。中国におけるキリスト教伝道の困難な情勢において、マテオ・リッチの宣教政策の転換は止むを得ないものである¹⁴。ところが、マテオ・リッチの宣教方法は、中国の知識人と官僚の心を掴んだので、明朝の高官¹⁵の中にも入信者が現れるようになった。また彼自身も儒学者の服装に改め、中国社会の指導者である儒学者の権威を、宣教の上に利用しようとはかったのである。このように、彼は明朝皇帝や知識人の信頼を得た結果、明朝政府はキリスト教が受容できる洋教と見なし、キリスト教を承認した¹⁶。その時の教勢がかつてない程増大し、受洗者も急速に伸びたのである。このような中国伝統文化習俗の折衷方法によって、中国の信徒と知識人から好感を得た。そのため、教勢に大きな発展があった。

キリスト教における本色化運動の中で、再びこの問題に直面した教会の指導者たちは、キリスト教が中国に伝来した 1804 年以降、キリスト者における祖先祭祀への参加を禁止した。これは中国の伝統文化、風俗との間に大きな衝突を生み、結局中国の民衆がキリスト教を「洋教」と呼び、キリスト教に入信することがなかった大きな原因の一つとなった。そのため、「郷に入っては郷に従え」で、中国のキリスト者の祖先祭祀への参加を認めることで、本色化運動は進められることとなった。それは、キリスト教の唯一の神への信仰と祖先祭祀との間には、何の矛盾もないし、神を崇拝するキリスト者は、自分の先祖を忘れることがないからである¹⁷。これらのことから、中国のキリスト者は先祖を忘れずという大前提のもと、祖先祭祀の儀式を改善し、キリスト者だけではなく、キリスト者以外の者にも真似る価値がある高尚な祖先記念の儀式を作り出した¹⁸。

二、祭日の風習

祭日は風習生活の重要な一部であり、全ての民族はそれぞれの伝統的な祭日を持っている。中国の伝統文化とキリスト教との間には大きな相違があるため、本色化運動の促進者はこの問題に注目した。王治心は「本色教会応創何種節期適合中国固有的風俗」において、「キリスト教を中国社会、中国固有の風俗と融合させるため、教会に属する祭日を決めなければならない」¹⁹と書いた。そのため、中国の教会の指導者たちは、キリスト教に従って決められた祭日儀式を中国の伝統的な祭日と相応に組み合わせるよう調整した。例えば、教会の新年を中国の暦の元旦に変更し、午前家庭で新年を祝い、午後2時に教会で新年礼拝を行う。もともとは、旧暦1月15日小正月が灯籠節であるが、太陽暦の1月13日-18日の間に変更し、信徒各自は一つの提灯を作り、教会の中に掛け、13日の夜から18日の夜まで蠟燭を付け、毎晩「提灯特別伝道集会」と名付けた伝道集会を開き、一般民衆の参加を呼び掛ける。中国の墓参り、清明節は、毎年4月4日であるが、中国の伝統的墓参り方法は、家族を揃って、先祖の墓に行き、墓の前に果物、香料などのお供えを置き、墓に向かって線香をあげ、紙銭を焼き、その後、儀式の参加者たちは、お供えを共に食べるのである。紙銭を焼くというのは、あの世で本当の銭として通用し、祖先があので暮らすための生活費や、天・地・水三界の神々への献金などとして用いる。また紙銭には様々な種類があり、神様に対して焼く金紙と先祖に焼く銀紙とに分けられる。キリスト教会はこのような伝統的な墓参りの儀式を礼拝、祈祷、賛美、献花に変更する。清掃節は、毎年の端午の節句には行うが、その日に合わせて、教会内の大掃除も行う。陰暦10月15日の中元節の際に、家庭内で祭祀を行うが、教会において家族親戚を呼び、記念礼拝を行う。孝行の日は、中秋名月の日に行う。中国の伝統的風習には、中秋名月の日に家族全員がそろう、親に感謝の意を表す。教会において、その日に子供が親に贈り物を渡し、午前10時に子供と親が揃って、教会の孝行礼拝に出席し、牧師の親孝行に関する説教を聞き、皆一緒に祈り、賛美を捧げる。感謝祭は陰暦の重陽の時にいき、各信徒は収穫した野菜、果物などを教会に捧げ、神の恵みを感謝する。礼拝後、教会は、捧げられたものを孤児院や、貧しい会員、牧師などに配る。クリスマスは、旧暦の12月に多くの神を祭ることと結合して、新しく年を迎える祭日に変化する。

以上述べたように祭日の調整が、キリスト教の祭日と中国伝統風俗との折衷案であった。一部の祭日は小範囲内で実行されたが、多くは理想に終わり、実行には至らなかった。

三、婚葬風習

結婚・葬儀は人生において、最も重要な事である。中国は礼儀の国と言われ、何千年来、結婚と葬儀の儀式を非常に大切にしてきた。近代欧米思想の影響によって、中国の伝統的な煩瑣な儀式は多少変化したが、キリスト教の儀式とはまだ大きな隔りがある。そのため、教会の本色化運動の促進者は「中国の古い作法は煩瑣であるが、教会の西洋的な作法は簡単すぎる。中国の古い作法の精神を保ちながら、煩瑣な部分を削除し、中国の民族精神から背離しない中で、キリスト教の真理から外れない儀式を考えることが

必要である。これは本色化運動の注目すべき問題である」²⁰ と考えた。そのため、時代の変化を考慮しながら、固有の民族特徴に配慮し、教会の本色化に適合できる結婚と葬儀の儀式を模索すべきである。

教会指導者たちの結婚の儀式に対する見解を見ると、結婚の起源観において、中国文化とキリスト教の教えは似ている。『易経』の序卦下篇には、「先ず天地があって、万物もあり、その後の順序は次のとおりである。男女があり、夫婦があり、親子があり、君主と臣下があり、上下がある……」と書かれていた。キリスト教の旧約聖書「創世記」には、神は天地、万物、人（アダム、エバ）という順序で創造したと書かれている。その後、結婚の歴史の変遷によって、中国とキリスト教は各自の礼儀儀式的風習観念を形成した。中国の婚礼は利害を重視し、その弊害は、婚姻には自由がなく、全て親の命令に従わねばならないことである。また一夫多妻制のため、男女は不平等であり、鬼神の類を信じ、鬼神の祝福を求めること、そして奢侈浪費で、純粋な愛情に欠けることなどである。利点としては、年齢規定があるため、早婚を避けることができ、同姓との結婚はしない、また父母の命令を重視し、道徳を重んじるため、婚姻は比較的安定している。全体から見れば、中国の伝統的婚姻は利点が少なく、弊害が多い。近代以来、ある程度、結婚儀式は変化したが、伝統的な風習の影響によって、大きな成果を挙げられなかった。しかし、キリスト教における結婚の主張とは、一夫一妻制で、夫婦は一体になるのであり、夫は妻の頭であると同時に、妻を愛さなければならないということである。聖書には、礼儀作法については、何も書かれていないが、イエスはユダヤ人が通常守っているモーセの礼儀作法について、何も反対しなかった。そのため、教会の指導者たちは、イエスの精神に基づき、中国の固有の特徴を保ち、誠意がない点を削除、折衷案を取り、通用できる結婚儀式を作り上げることを考えた。改良された中国におけるキリスト教結婚儀式は、国民の特性を保ちながら、迷信の風習にも従わず、キリスト教の信条に適應すると同時に、西洋の風習をそのままに受け継ぐだけでなく、双方の真髄を選び、長所をもって短所を補うというものであった。

配偶者を選ぶに当たっては、各自が相当の自由を持つ（教会内部に限る）。そして双方の両親の同意のもと、交際が可能となり、結婚という共通認識を持つ時、結婚の時期を定める。

婚約の儀式。教会で牧師の立会いのもと、賛美、祈り、婚約の儀式を執り行う。

男子の結婚年齢は 25 歳以上であり、女子は 20 歳以上でなければならない。

結納金などは一切廃止する。

結婚の期日について、牧師のアドバイスを受けながら、双方で決めた後、新郎の方から親戚や友人へ招待状を出す。

結婚式。結婚の当日の午前に宴席を設け、午後 2 時に新郎は家から輿や楽隊を連れて新婦を迎えに行く。新婦は先ず家の奥で両親や兄弟と一緒に祈り、両親から女性として守るべき道についての教えを聞く。その後、両親、親戚、友人と一緒に教会に行き、牧師立会いのもと、結婚式を行う。

このように、キリスト教における本色化の結婚式は中国の伝統的な結婚礼儀作法を取り入れたものであった。

中国は従来葬儀の儀式も大切にしてきた。儒教では、「生まれること、死ぬこと、祭祀のことは皆礼儀作法を持つべきである」と教えられている。孟子は人々に孝行を勧めるため、生きている親を扶養し、亡くなった親の葬儀をすることは王道の始まりであると語った。儒教では、簡単な葬儀の礼儀作法を勧め、声をあげて泣き悲しむ孝行行為の目的を達すれば、十分であると教えられていた。しかし、歴史的に葬儀の礼儀作法の変遷によって、葬儀も奢侈になり変化した。死者があので使えるように紙で作った銭（紙銭）を焼くなどの迷信行為を取り入れたこと、面目を保つため、お坊さんや道士などが絶えないなどは、大げさに見栄を張ることの表れであった。そのような葬儀はうそ偽りの儀式になり、本来の悲しみ、哀悼の心情が消えてしまった。そのため、中国の教会の本色化運動の促進者は、「キリスト教では、死者のことを眠る人であると考えため、キリスト教の益ある精神を持って、中国の煩わしくて意味のない儀礼の弊害を改良し、適当な葬儀作法を規定する」²¹と主張した。

一部の本色化運動の促進者は、意図的に本色化した葬儀の儀式作法の案を提示した。

親族に知らせ、「キリスト教儀式に基づき、一切の仏道教式を排除する」という言葉を入れる。

亡くなった父母の遺体を広間に移し、両側には花を飾り、白い蠟燭をつける。棺の上に死者の写真を置き、写真の周りに白い幟と哀悼用の対聯を飾る。遺体は家に1-2日ぐらい置き、牧師は遺体の前で礼拝を行い、祈祷、聖書朗読、賛美も含まれる。

親族は喪服を着る。親族中の同年配または目下の者が中国の伝統的な白い喪服を着、3年以内は家庭内において、妻をめとることと、嫁ぐことはできない。3年満期の時、礼拝祈祷が行われなければならない。

出棺埋葬。出棺の前、牧師は礼拝を司り、その後、喪主は牧師の後に付き従い、棺と共に家から出る。親戚は野辺送りをする。墓地に着き、埋葬の前、牧師はもう一度礼拝を行う²²。ある地方において、このような変革された葬儀の儀式を本として印刷し、各教会へ普及させる。

四、礼拝儀式

キリスト教が中国の文化と融合し、中国の民衆によって受け入れられることは、決して簡単なことではない。文化は外在の様式と内在の精神という両面を持っている。中国のキリスト教指導者たちは教会の礼拝様式において、本色化の実践に力を注いだ。1927年、上海のキリスト教会において内地会²³から独立した新しい組織が成立した。その組織は「上海キリスト教徒新団契」と名づけられた。設立の目的は本色教会の様式を作るためであった。その組織は讚美歌の改訂から着手し、中国の伝統的な楽器笙、笛、琵琶で讚美歌を演奏したり、中国の伝統的なメロディーで新しい讚美

歌を編集したりした。一年間の間 50 曲以上の新しい中国語讚美歌を創作した。信徒はこれらの讚美歌を歌いながら拍子を叩き、その親しいメロディーにすぐ慣れていった。更に彼らは会堂の設備や式文も変更した。彼らは儒教式を礼拝に取り入れた。会堂の中に座席を置かず、会堂の真ん中に聖壇を設け、聖壇の横は講壇であった。礼拝中に聖壇の前に銅の炉を置き、線香を炊き、礼拝のときに香の煙が立ちこめ、参加者は聖壇の前に跪いて祈るのである。説教者は身に黒い丸い襟のガウンをつけ、中国式の装いをする。そして彼らは教会の体制も改革し、階級制度、主教、長老制度に反対し、実行委員会を作り、聖職者と信徒は共に教会の仕事を分担し、教会を管理するものとした。彼らはこの教会こそ、中国式のキリスト教であると主張した。彼らは、中国人宣教者を増加させ、中国式の宣教方法を採用する（「自伝」）ように努力する一方で、キリスト教を中国化し、「自治・自養」の実現を目指した²⁴。

このような実践は、キリスト教教義と抵触しないだけでなく、中国の民衆の心理に適合し、まさにキリスト教本色化の実践の表現の一端である。

五、教会建築

中国式の教会堂の建築は、1920 年代中国におけるキリスト教本色化実践の特徴の一つである。中華基督教協進会の「本色教会常備委員会」の報告においては、本色化の実践に関して、次のように紹介されている。「ある教会の新しい礼拝堂は上下に二階に分けて造り、上は神を礼拝するための専用の場所として、椅子を置かず、立ったままで祈祷、讚美歌、聖書朗読を行ない、下では椅子に腰掛けて、牧師の説教を聞いた、ある時には討論などの場所として用いる」²⁵と。

この報告について、中国のキリスト教指導者誠静怡は次のようにコメントした。「今日の教会は一種の病を患っている。人々は教会に礼拝に行く時、牧師の説教を聞くことのみを欲し、礼拝の後にこれを批判し、また牧師の説教の優劣をもって最上か否かを定める。その結果、礼拝に行く会衆の人数もまた牧師の説教の上手か下手かによって増減する。いま問題にしているその教会は、上述の弊害を糾正しようと欲し、階上では神を拝み、階下では説教を聞くように設計した。これは本色の表示の一端である」²⁶と。

現在中国に唯一残された中国式の教会堂の建築は、上海の鴻徳堂である²⁷。鴻徳堂は上海の多倫路 59 号に位置し、前身はアメリカ長老会滬北堂であった。1874 年、アメリカ長老会は美華書館附設思婁堂を設立し、1902 年、美華書館は四川路に引っ越したため、思婁堂は長老会滬北堂と改名した。1925 年、中国人牧師蒋時叙が主任牧師として赴任してから、信徒の協力を得て、楽安路（今の多倫路）の土地を購入し、新しい教会堂の建設に着手した。アメリカ長老会美華書館の責任者費啓鴻を記念するため、新しい会堂を鴻徳堂と名づけた²⁸。本色化を現すため、当該教会は、中国古典式建築を採用、会堂の一階に小礼拝堂、二階にバシリカ風大礼拝堂を設けた。会堂外部には中国伝統の殿宇スタイルや、西洋の雰囲気をもうまく併せ持ったデザインも取り入れた。入口のところには、四角形の鐘楼があり、鐘

楼の先端は楼閣式で形取られた。外壁は青レンガが積みあげられ、擬木構造の赤いコンクリート柱も取り入れられた。軒下には装飾画が飾られた²⁹。鴻徳堂は1928年10月に完成し、建築費用は12万元を要した。そのうちの半分は中国信徒の献金で賄われ、残り半分は費啓鴻の遺族の献金が用いられた。



鴻徳堂外観



鴻徳堂建築の紹介

六、讚美歌

音楽はキリスト教信仰体系の中、重要な位置を占めた。神はイスラエルの民に、音楽をもって礼拝するようにと命じた。音楽は硬い心を柔らかくし、気落ちする霊を奮起させる。また、言葉や文書伝道と同じく、もう一つの宣教の大きな手段でもある。キリスト教が中国に伝来した当初、西洋のキリスト教音楽は一時的に民衆の興味を引き寄せたが、時が経つにつれ、それも薄れてしまった。そのため、1920年代から、一部の中国のキリスト者は本色化の讚美歌の創作に着手し始めた。彼らは、聖書の神髄は、中国の民衆の親しい音楽と組み合わせることで、身近なものとして受け入れられ易くなると思った。彼らの本色化讚美歌の創作は、中国の音楽を立脚点に置き、西洋的、翻訳的、伝統的な讚美歌のイメージを突破し、中国の民族的で人情味に富んだ親しい中国風の讚美歌を作ることに重きが置かれた。1929年中華基督教会は1920年代の本色化讚美歌の創作の大集成として『普天頌讚』を編集した。編集委員は楊蔭瀏、劉廷芳など当時のキリスト教知識人であった。1936年『普天頌讚』³⁰は正式に刊行された。それは最初の中国の各種の音楽風格を含めた讚美歌集であった。その中、72曲の中国伝統のメロディーの讚美歌が含まれていた。民謡、俗謡、七弦琴のメロディーなど中国人や西洋宣教師の創作した作品である。特に注目されるのは、趙紫宸が作詞した163番「恭敬讚美歌」、407番「謝恩


歌」と朱葆元の作詞、楊蔭瀏の作曲の310番「三省歌」である。163番「恭敬讚美歌」のメロディーは中国の仏教音楽の中の普陀節をモチーフに、「大慈大悲、養息身心、皈依」などの仏教の用語が使用されている。407番「謝恩歌」のメロディーは孔子廟において孔子を祀る音楽孔廟大成樂章の宣平調から、「無量、安康、好生德、造化功」などの儒教的な用語も取り入れられた。310番「三省歌」は、中国の伝統的な平仄や韻律などの規則のある定型詩（律詩、絶句）の手法に従って、作成された³¹。

仏教音楽のメロディーの讚美歌

163 恭敬讚美歌 教會：公共禮拜

趙紫宸詞 T. C. CHAO, 1931 普陀 (P'U T'U) 8. 8. 7. 8. 佛號 Buddhist Chant

°TO DAY ANEW WE WORSHIP THEE



1 今朝我們恭敬謙卑，讚美天父大慈大悲；
 2 我們勞苦，天天作工，今朝禮拜，在此堂中，
 3 我們擔當苦與悲傷，有時心裏黑暗無光：

懇求天父賜哀憐，饒恕我們一切罪愆。
 養息身心蒙主恩，知道主恩永遠長存。
 父啊，父總不離開，父和苦人時刻往來。阿們。

4 我們因父快樂平安， 無論禍福總是喜歡；
 天父仁愛是福音， 父啊，父的愛最光明。

5 因此我們獻上身心， 永遠永遠歸依聖名，
 天父，俯念我們求， 求將我們永遠收留。

151

儒教の孔子廟で奏樂するメロディーの讚美歌

407 **謝 恩 歌** **時序:收成感謝**

°PRAISE TO THEE, WHO GIVEST THE HARVEST

趙紫宸詞 宣平 (°HSÜAN P'ING) 孔廟大成樂章
T. C. CHAO, 1931 5. 5. 5. 5. D. Confucian Chant

1 讚 美 聖 天 父, 恩 典 廣 無 量,
2 讚 美 聖 天 父, 恩 保 佑 我 無 鄉 農,

春 風 與 夏 雨, 秋 收 又 冬 藏,
父 教 萬 物 長, 父 使 五 穀 豐;

粟 米 像 珍 珠, 莊 稼 有 清 香,
我 來 獻 感 謝, 高 唱 有 樂 無 窮,

工 作 雖 勞 苦, 生 活 得 安 康。
頌 揚 好 生 德, 榮 耀 造 化 功。阿 們。

435

310

三省歌

聖徒本分

"HELP ME, O LORD, TO SEARCH MY HEART"

三省 (°SEARCHING)

楊藝瀾詞

朱葆元詞, 一九二九

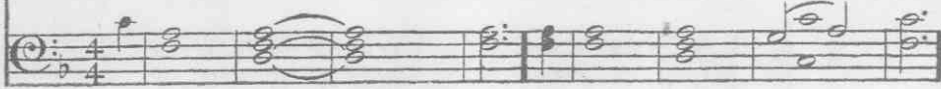
L. M. WITH REFRAIN

ERNEST Y. L. YANG, 1934

同聲



1 一省吾身, 信道 有年, 與主睽違, 物質 爲先:
 2 二省吾身, 受洗 有年: 曾否 爲主傳道 力專,
 3 三省吾身, 從主 有年: 曾否 爲主作證 人間,



父, 母, 伯, 叔, 兄, 弟, 姊, 妹, 合 家 拜 主, 是 否 誠 虔?
 曾 否 在 家, 福 音 宣 傳, 心 清 意 潔, 聖 靈 寶 殿?
 光 陰 似 箭, 事 主 努 力, 日 月 如 梭, 信 仰 彌 堅?



副歌



門 牆 主 化, 光 照 在 前, 分 工 合 作, 福 德 無 邊。(阿們。)



中国古代の詩の韻律に基づいて作成した曲

七、聖書翻訳

1843年に上海で5教派8名の宣教師（倫敦会・公理会・長老会・浸礼会、聖公会）による聖書漢訳の合同委員会が組織された。この合同委員会の新約聖書は1850年完成したが、キリスト教の神を現す漢語について、意見が一致せず、先ず浸礼会の宣教師は合同委員会から撤退した。その結果「テオス」の訳語として、大体においてウォルター・ヘンリー・メドハースト（麥都思 Walter Henry Medhurst）、ギュツラフ（郭實獵 Karl Friedrich August Gutzlaff）などの英国系教派の宣教師たちは英国の聖書協会の援助を受け、「上帝」という訳を用いた。しかし、ブリッグマン（裨治文 Elijah.C.Brigman）、ブーン（文惠廉 W. J. Boone）などの米国系教派の宣教師たちはそれに対して不満を持ち、米国聖書協会の支援によって、「神」を用いて漢訳の聖書を出版した³²。このように教派間の協力は試みられたけれども、最初に意思されたプロテスタントに共通の一つの漢訳聖書の出版は実現しなかった³³。その後、中国の教会指導者たちも「テオス」の訳語について、意見が分かれた。一部の中国の指導者は、「上帝」という訳語を支持した。中国の古代信仰と古典において、「上帝」、「天」は天地万物を支配する宇宙の最高神であった。その意味で、古代の民衆は拝む創造主「上帝」の品性は、聖書における「テオス」と一致した。もう一部の指導者にとって、「上帝」は中国民衆の拝む対象であり偶像でもあったゆえ、その訳を拒否し、「神」という訳を支持した。しかし、「テオス」の訳語についての対立は、中国での教会の発展にとって、必要か否かについて、宣教師たち及び中国の教会指導者たちは深く反省した。実際に、「上帝」と「神」は中国文化の文脈において、両方ともキリスト教の「テオス」の意味を表しているし、中国のキリスト者に正しいキリスト教の神概念を理解させる。1904年宣教師たちは北戴河で会議を開き、「テオス」の訳について討論し、共同の見解がまとめられた。宣教師たちにとって、中国におけるキリスト教の発展をさせるため、教派間、宣教師間の不必要な対立を除き、互いに尊重しあい、平和共存することが一番大切である。「テオス」の訳語は、「上帝」であれ、「神」であれ、中国人の教会及び中国人キリスト者に委ねられればよい、宣教師の働きは、中国人キリスト者を助け、キリスト者の生き方を養成させるのである³⁴。その結果、今日の中国教会は、「上帝」と「神」の二つの版の聖書を使っている³⁵。

結論

1920年代に中国の教会は、国内の情勢不安と国外からの侵略という不穏な時代の下に、キリスト教が中国の文化社会の中に根を下ろして、開花し、実を結び、それによって緊迫した情勢から脱出するために、キリスト教の本色化に迫られた。中国の教会の経済と組織が変革されても、キリスト教の礼拝様式や建築などの基本的中身を本色化しなければ、民衆はいつになってもキリスト教を「洋教」と呼び、キリスト教は中国社会の中に浸透できない。以上のように、考察した通り1920年代の中国の教会指導者たちは、聖書に基づいて、積極的に本色化の実践を展開し、キリスト教を中国の国情、民情に適合させることを試みた。中国社会と緊密な関係を持ち、中国の中心的な宗教伝統・宗教文化の神髄とキリスト

教とを融合することによってはじめて、キリスト教は新たに中国の宗教伝統と文化を解釈することができる。さらに本色化した礼拝儀式や教会の建築、讃美歌、聖書翻訳などを通して、中国キリスト教は、中国人にとって、遠い西洋のものではなく、一層身近なものとなり、受け入れやすくなるのである³⁶。

しかし、1920年代の中国における本色化の実践において、教会の一般信徒の参加は明らかに欠けている。キリスト教の本色化運動の計画から実践するまで、ほとんど教会の指導者層に留まり、教会の一般信徒の参加は非常に少なかった。確かに、キリスト教における本色化の方向性及び理論的指導は、教会の指導者たちの働きであるが、実際に教会の内部で展開及び実践する場合は、教会の基礎である一般信徒の協力と参加がなければ、教会全体に浸透できない。本色化の実践は、教会の指導者たちの独占のものや、上から押し付ける展開ではなく、教会の指導者と信徒との力を合わせ、共に努力する過程である。今後、一般信徒の参加及び協力を如何に教会の内部の本色化の実践に取り入れるのは、本色化実践の成功の鍵となる。

さらに、1920年代の本色化の実践はある程度の方向性を示したが、キリスト教が中国の社会に浸透する際に、中国の伝統・文化と融合するあまり、本質の一部を失ったとの批判もある。キリスト教が中国伝統文化・宗教の主体をしっかりと認識しながら、対等の立場で、対話と融合することが不可欠である。今後、どのように西洋伝統的な教会の模式の束縛から抜け出し、キリスト教の本質を失わず、中国の特色あるキリスト教として発展していくのかが大きな課題になる。

1920年代のキリスト教本色化の実践において、本色化の種子はすでに中国の社会に蒔かれていた。これから、じっくり育てられ、実を結ぶようになるのを待っている。この過程は相当困難であり、絶えず模索し、実践し続けることが必要である。

¹ 顧長声『伝教師与近代中国』、上海人民出版社、1981年。

² 楊天宏『基督教与近代中国』、四川人民出版社、1994年。

³ 顧衛民『基督教与近代中国社会』、上海人民出版社、1996年。

⁴ 白寿彝編『中国通史 近代編上、下』、上海人民出版社、1999年。

⁵ 熊月之編『上海通史』、上海人民出版社、1999年。

⁶ 章開沅『湖北通史 民国卷』、華中師範大学出版社、1999年。

⁷ 史全生編『中華民国文化史』、吉林文史出版社、1990年。

⁸ 李志剛「民国以前香港基督教之本色化事業及其影響」、林治平（編）『基督在中国的本土化』、今日中国出版社、1998年参照。

⁹ 湯清『中国基督教百年史』、香港道声出版社、1987年。

¹⁰ 查時傑『民国基督教史論文集』、台湾宇宙光出版社、1994年。

¹¹ 楊森富『中国基督教史』、台湾商務印書館、1968年。

¹² 邵玉銘『20世紀中国基督教問題』、正中書局、1980年。

- ¹³ 山本澄子『中国キリスト教史研究』、山川出版社、2006年。
- ¹⁴ 吉田寅「景教の東方伝道」、日本基督教団出版局（編）『アジア・キリスト教の歴史』、日本基督教団出版局、1991年、137頁。
- ¹⁵ 徐光啓、李之藻などのエリートは学識ある官吏であり、政治的社会的指導者でもある。
- ¹⁶ 吉田、前掲書、130-133頁参照。
- ¹⁷ 范伯誨「中國祭祀祖宗的我見」『青年進歩』、第109期、1928年、20頁。
- ¹⁸ 同上、21頁。
- ¹⁹ 王治心「本色教会の創如種節期適合中国固有の風俗」『文社月刊』、1:6、1926年、21頁。
- ²⁰ 王治心「本色教会の婚喪礼芻議」『文社月刊』、1:6、1926年、69-70頁。
- ²¹ 同上、69-84頁参照。
- ²² 同上、69-84頁参照。
- ²³ 内地会はHudson Taylorが中国伝道の特色をもつという信仰に基づいて特に中国のために始めた伝道会である。
- ²⁴ 李向平「本色化与社会化 近代上海海派基督教的社会化歷程」『上海大学学报』、第11巻第3号、2004年、12頁。
- ²⁵ 山本、前掲書、267頁。
- ²⁶ 同上、268頁。
- ²⁷ 1920年代にキリスト教本色化運動の影響で、中国各地に数多くの中国式会堂が建てられた。特に開港直後の沿岸都市において、中国式会堂は非常に目立っていた。しかし、文化大革命中にこれらの会堂が破壊され、現在まで良い状態が保存されたのは、上海の鴻徳堂である。
- ²⁸ 孫金富編『上海宗教誌』、上海社会科学出版社、2001年、523頁。
- ²⁹ 鴻徳堂の紹介パンフレットを参照。
- ³⁰ 聯合聖歌委員会『普天頌讚』、香港商務印書館香港印刷廠、1955年第三版。
- ³¹ 1920年代に作成された中国風の讚美歌は現在の中国三自愛国教会が使っている『新編讚美歌集』において、約40曲あまり収録された。
- ³² カトリックはプロテスタントと違って、「天主」という言葉を用いて聖書を漢訳した。
- ³³ 山本、前掲書、26頁。
- ³⁴ Fen, Courtenay H., John, J.B.St., “Conference on Federation at Pei-tai-ho”, The Chinese Recorder 35, 1904, pp.554-555
- ³⁵ 程小娟「教務雜誌的God漢訳討論研究」、劉樹森編『基督教在中国：比較研究視角下的近現代中西文化交流』、68 - 84頁。柳父章『「ゴッド」は神か上帝か』、岩波現代文庫、2001年。柳父章『ゴッドと上帝 歴史の中の翻訳者』筑摩書房、1985年など参照。
- ³⁶ 1920年代のキリスト教本色化運動は、当時の社会的及び政治的な原因で1930年代以後後退していた。しかし、中国のキリスト教の指導者は自分のできる範囲で本色化の努力を続け、

アジア・キリスト教・多元性

現代中国のキリスト教に受け継がれているものと言える。特に 1950 年以後、中国の三自愛国教会が成立し成長するための理論及び実践的な方向性を与え、良い手本になった。

(XU Yi Meng 関西学院大学神学部非常勤講師)